

# 浅野誠

# 芸術

## 2014～2020年

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」<https://makoto2.ti-da.net> のなかの 카테고리 「芸術」で2014年から2020年に掲載した記事を収録したものである。

目次をみて気づくのは、2017年以降、記事が激減する。長く務めたシュガーホール運営審議会会長職を任期満了で降りたこと、友人の作曲家中村透の死去という大きなできごとがあったからである。私にとって、とくに芸術関係では、シュガーホールと中村透が大きな存在であったことを再確認させられた。

芸術は音楽だけでない。美術工芸もあるが、そのかわりでは半島芸術祭 in 南城が終わったことが大きい。今後も芸術との付き合いはあるだろうが、細々と続く形になりそうだ。

2021年2月

## 目次

配列はブログ掲載年月日順

中村透とシュガーホール	2019年03月22日
沖展	2018年03月29日
水準高まるシュガーホール新人演奏会	2017年06月07日
久高オデッセイ第三部を観る	2017年06月01日
ノリタケクラフトセンターでした皿の絵付けが届く	2017年04月14日
やどかりの夢	2016年11月22日
世界のウチナーンチュ大会 正子・ロビンズ・サマーズさんの絵	2016年11月05日
幣隆太郎 コントラバス リサイタル	2016年08月09日
「巨匠たちの奇跡」「宮良瑛子 いのち」「月に向かって」	2016年07月30日
県立博物館美術館 ゲルニカ 「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」	2016年04月02日
経済協力開発機構(OECD)『創造的地域づくりと文化』(明石書店2014年)を読む	2016年03月01日
シュガーホールオペラ「あちゃーあきぬ島」観劇 大坪さん、丹野夫妻との出会い	2016年02月29日
じかに触れ考え行動して創造する博物館へ 博物館本をいろいろと読む	2016年02月19日
NHKあさいちに映っていた?! NHK交響楽団メンバーのコンサートを聴く	2016年02月08日
沖縄県立芸術大宇オーケストラによるオーケストラレクチャー&公開リハーサル	2016年01月26日
シュガーホール・ニューイヤーコンサート	2016年01月12日
730バスで行くなんじょう音楽ゆらり旅 ほかたくさん回った21日	2015年11月21日
コラクリでのデザイン・織への挑戦 半島芸術祭	2015年11月17日
南城青年芸能祭	2015年09月23日
リッカリッカ・フェスタ オープニング	2015年07月29日
新人演奏会 沖展	2015年03月25日
わらび座公演「笑いはずづく」小那覇舞天の物語を観劇	2015年02月01日
感動のシュガーホール・ニューイヤー・コンサート	2015年01月12日
恵美子も演奏したピアノ Concert	2014年12月01日
半島芸術祭訪問記2	2014年11月17日
半島芸術祭 in 南城 工房訪問記1	2014年11月16日
オンチが音楽を楽しむには 私と音楽	2014年11月06日
新崎誠実&新崎洋美ピアノ・デュエットリサイタル	2014年08月19日
「オムツ党走る」 こんな面白いものを見るのは久しぶり	2014年08月04日
クラシックコンサート観客数の増減 シュガーホール新人演奏会	2014年07月26日
続々クラフトフェア 真境名照子さんのウージ染大作	2014年04月25日
ふくろう 湯呑 続クラフトフェア	2014年04月22日
にぎわうクラフトフェア 知り合いも多いが、初対面のクラフトも多い	2014年04月20日
渡久地圭フルートリサイタル「ウィーンの風 Vol2」	2014年04月15日
小沼純一「オーケストラ再入門」平凡社2012年を読む	2014年04月12日

沖展鑑賞	2014年03月29日
磯崎主佳展&大池功コンサート	2014年03月03日
三島わかな「近代沖縄の洋楽受容」の書評会	2014年02月23日
「難しいけど面白かったという感想は教育で作られた」！ 小池博史舞台芸術「銀河鉄道」	2014年02月03日
シュガーホールニューイヤーコンサート「新世界より」	2014年01月13日

## 中村透とシュガーホール

2019年03月22日

2月7日に逝去した中村透の思い出を語る会がシュガーホールで、21日にもたれた。劇団賞味期限、シュガーホール創立にかかわった行政関係者、ジュニアコーラス卒業生、コーラスグループ・新人賞参加者、教え子たち・・・たくさんの方々の語りのなかで、中村透の音楽・人のかかわり・人柄などが浮かび上がってくる。聴きながら、彼の音楽・役割・人柄などをめぐる私の持つイメージがますます豊かになる。浮かんできたイメージを書きつづろう。

・中村透の音楽は、多様な音楽・人々の魅力的な集合体・ハーモニーといえよう。かれは多様なものに旺盛に関与するなかで、多様なものを吸収し再創造してきた。それは彼が会えるものがそれだけ多様で豊かであったからだ。洋楽、日本音楽、そしてなによりも沖縄音楽との出会い、それは歴史的蓄積とよぶにふさわしいものだ。そうした多様なものを吸収・再創造するかれの貪欲な姿勢はすさまじかった。かれのアレンジのすごさを語る人が多いのは、こうした背景があるからだろう。

・かれは、自分がつくったものを人に演奏させるという姿勢とは対極的で、その場に参加する人々自身が音楽創造に参加するのだという姿勢で、自らも参加し、音楽を創造していった。だから、即興性にも溢れていた。沖縄は、そうしたかれの姿勢を喜んで受け入れ、支え、共同創造していった。だから、彼と沖縄とは相互愛に満ちていた。それは、彼とシュガーホールとの関係についても言えることだ。だから、サトウキビ畑のなかの音楽ホールがしっかりと根付いていった。青年会が劇団賞味期限を、婦人会がコーラス・ウィングスを、生み出すという関係をつくっていく。さらには、地域の音楽芸能が、シュガーホールという場で一段と発展していく。そして、全国的にも有名になった町民・市民ミュージカルを生み出していく。

そうしたありようが、クラシック音楽自体を発展させるという構図さえ作り出している。

・さらに、多様なジャンルがかかわりシュガーホールの表現創作を広げ深めていく。こうした多彩なものをつなげていくコーディネーター役割を中村透は果たし、そしてここに集う人々による総合表現をコンポウズ（構成・作曲）してきた。そうしたものは、今後、シュガーホールにかかわる地域の発展をどう推し進めるのだろうか。次の歴史ステージに期待がかかる。



・このようなシュガーホールと彼の仕事は、全国、さらにはアジア各地に強い刺激を与えた。とくに地方オペラ創造、人々と音楽のかかわり・つながり方、ホールのありよう、など、今後の歴史的な意味づけを膨らませることが期待されるものは大きい。

## 沖展

2018年03月29日

一年に一回、出かけるという定番のものがいくつかある。2月の洋蘭博覧会がそうだし、3月下旬の沖展もそうだ。南城市の半島芸術祭もそうだが、現在は休業中なので、最近は出かけようがない。それに代わって定番になっているのは、4月下旬の玉城体育館でのクラフトフェアだ。

南城市のオープンガーデンもそうだが、会場を回りつくしたので、今回はやめにしておこう。春秋と年二回あることだし。

他にもあるかもしれないが、思い出せない。そういえば、日本生活指導学会も定番であったが、最近はお休みしている。引退間近になりそう。卓球試合には毎年出場する定番のものがあるが、別の機会に話題にしよう。

さて、今回は、沖展の話をしよう。10年以上前から時々出かけていたが、最近、主催している沖縄タイムスの販売店から、毎年読者優待券をいただいているので、まさに定番になっている。土日などは混むようなので、平日の朝にかけている。

毎年見ているが、年々作品が進化している印象をもつ。関心が薄い書道なども、芸術性高い創造的なものが出されており、驚かせるものがある。私が関心をもつのは、絵画、彫刻、ガラス、写真などだ。それにしても、選ばれた、これだけの質と量のものが展示されるということはすごいことだと思う。絵画や彫刻などは、私などがイメージするものをはるかに超えた作品の連続だ。制作者の質と量が飛躍しているようだ。

だから、鑑賞には体力が必要だ。1時間を超えると、もう耐えられなくなる。もったいない話だ。消化不良のままだ。

平日午前の会場は、9割ぐらいが女性だ。私と同世代の女性も多い。仲間と一緒に楽しそうに鑑賞しておられる。美術展は圧倒的に女性に支えられているのだろうか。同世代男性にこの楽しみを知る人が少ないのだろうか。それとも、この場に來られる条件をもつ男性そのものが少ないのだろうか。

## 水準高まるシュガーホール新人演奏会

2017年06月07日

6月4日午後開かれたシュガーホール新人演奏会。昨年は、中山区豊年祭とダブったため、聴けなかったのが、2年ぶりとなる。ここ10年余り、聴き続けたので、オンチで素人の私でも、変化を感じる。

おおまかにいうと、水準が随分高くなっている。10年ぐらい前までだとグランプリをとれただろう、という演奏者が目白押しだ。演奏者も自信があるのか、堂々たる演奏ぶりだ。

定番のピアノ、バイオリン、声楽に加えて、今年はマリimbaとトロンボーン。近年、マリimbaの活躍が目立つ。これは、シュガーホールの特徴でもあろう。多様な楽器の種類を問わずに応募できるからだ。

聴衆も楽しめるような構成になってきたことが大きい。演奏の合間に、演奏者の紹介やインタビューがあることの評判はいいようだ。10年ぐらい前だと、演奏者の親戚知人などが多くを占めていたが、いまでは、クラシック好きな人があちこちから集まっている。聴衆も多くなった印象。

それだけ、この演奏会が定着するだけでなく、評判を高めており、かなりの水準の人たちがオーディションに集まってきている印象だ。

と同時に、新人演奏会を含めシュガーホールの存在が、クラシックファン人口を増やしている印象をもつ。そして、郷土芸能を含め、音楽芸能人口の量だけでなく、質を高めてきているのではなかろうか。私のようなオンチシロウトでも、付き合ってくると、多少なりとも、音楽性が身につけてきた感じがする。「環境は、人を育てる」ことの典型になるかもしれない。

私の合唱は、数年前に挫折したが、一応歌えるようになった。4月の父の法事の際は、童神を歌った。30～40年前に、私が歌うと、まわりが進行を中断させて、私の声にあ然としていた時代は、一応過去のものとなった。もっとも、ハーモニーのある合唱となると、途端にブレーキがかかる状態を卒業することは無理だろう。



## 久高オデッセイ第三部を観る

2017年06月01日

27日夜、垣花の「涼風」(写真)でもたれた「久高島のドキュメンタリー映画と雑穀料理を楽しむ夕べ」に参加。この映画は、以前から観たいと思っていたが、やっとチャンスがめぐってきた。被写体は、何度もみたことがあるものが多いが、こうやって画像になり、あらためて美しさを確認する。なぜか、水平方向の美しさに、見とれる。久高に限らず、このあたりは水平方向に美しさが広がる



ところだな、と思う。景観だけでなく、ニライカナイがそうであるように、スピリチュアリティの世界も水平方向のようだ。私の視線も、タマグスクを見る時に、やや角度を上げるくらいで、いつも水平方向だ。映画のなかでは、ニライカナイは、遠くにあるのではなく、久高、人々が生きるいまここにあるという趣旨の大重監督のメッセージが印象的だし、共感的だ。

久高に限らず、このあたりは、長い歴史の積み重ねが、重層的に豊かさを作りだしているところだ。古い昔をとどめているという表現よりも、その方が実感的だ。歴史を振り返ると、時の為政者により、

神々も再編されてきたといえよう。久高については、湧上元雄さんの著書がそうした世界を垣間見せてくれる。

25年ぐらい前に、名古屋で姫田忠義さんの久高についての映画を見る機会があったが、どなたかが「日本の古い姿を示している」という表現をなされたことに、私は強い抵抗を感じると発言したことが記憶に残っている。久高には、古い世界だけでなく、現在においても、多様な人々・生き方が重層的に共在している。女性と男性、島外からの来訪者、若い世代・・・、この映画はそうしたものを描いている点でも、興味深いものがあった。

## ノリタケクラフトセンターでした皿の絵付けが届く

2017年04月14日

4月2日に名古屋駅近くのノリタケの森のクラフトセンターで絵付けした皿が、10日に届いた。

初体験で難渋したが、難渋した割にはよくできた。

難渋したのは、細い筆で、絵具をのせるのに苦労した事。描いた色が、焼くとどんな色になるのかイメージがわからないことなどによる。

皿には下絵が描いてある。私は「唐草模様」を選んだ。下絵の線は、焼くと消えるのだそう。 「唐草模様」の下絵に色を付けるのだけではつまらないので、私は大胆に図柄を加えた。「唐草模様」の背景にいつも見ている海を描くというものだ。そして3月末にあった浜下りを思い出して、旧3月3日の三日月も描いてみた。合わせて、宵の明星を描いてみた。残念ながら、金色で描いた月・星はうまく表現できなかった。海と岩の方は、うまくいった。

私は40分ぐらいで書き上げたが、恵美子は1時間を越した。



写真は、上から、焼きあがった皿、描き終えた直後のもの。焼きあがってみると、意外と色が濃いことが分かった。恵美子の方は、強いコントラストで、花を描いていた。楽しい思い出になったので、いつか再挑戦しようと話し合っている。

## やどかりの夢

2016年11月22日

毎年この時期は、南城市の諸行事が目白押しだ。半島芸術祭、オープンガーデン・コラクリアーツ……。日程のかちあいで、行けないものはいくつも出てくる。そんななか、20日夜シュガーホール屋外広場で開催の影絵と音楽の「やどかりの夢」に出かける。私たちの友人アマム YUKI の歌三線が絶品だ。以前から聴いているのだが、こんなにうまいとは、と絶句。

影絵も楽しめた。大型スクリーンでの影絵。30～40年前に、OHP を使った影絵に凝っていたころを思い出す。

子どもたちが大量に参加。それに親たちが沢山参加。子ども達の元気良さに圧倒されながらの進行。影絵も子どもたちもエネルギーに溢れている。



## 世界のウチナンチュ大会 正子・ロビンズ・サマーズさんの絵

2016年11月05日

強い関心をもってきた世界のウチナンチュ大会。今回は、29日にセルラー・スタジアムの中心会場に出かけてみた。

とても明るく楽しい雰囲気。1999年にトロントで出かけた多文化フェスティバルに共通するものを感じた。実に多様なものが飛び交っている。と同時に、なぜか「懐かしさ」を感じさせる。

出会ったブースも多様だ。

- ・なんと琉球大学があった。出版した本のゼロ円セールがあった。分厚い本を3冊もいただいてしまった。
- ・佐喜真義肢のブース。名前は聞いていたが、実物に出会うのは初めてだ。膝関節を補強する器具の体験紹介をしていた。いつかお世話になるかもしれない。こうした企業の奮闘ぶりは素敵だ。







- ・虫よけ服のブースでは、買ってしまった
- ・食物のテントも楽しい。ブラジル・アルゼンチン・トルコの食べ物を買って、昼食にした。

次に、沖縄タイムスで開かれている正子・ロビンズ・サマーズさんの展示を見に行く。彼女のキャリアについては、多くのニュースなどが流れているので、ここでは省く。

展示されている絵はショックを受けるほど強烈だ。ちょっと見には、そう感じずに、穏やかさ、美しさを中心の印象が多いかもしれない。私は、どう表現した

らいいかわからないが、強烈に発するものを感じ、ドギマギするほどだった。とくに、最初の数枚がそうだった。花の絵でいうと、それらの花が動いて、踊っているように感じる。傷ついて、踊れない花もある。

そして、なぜか、それらのいくつかの絵の左上の箇所に、その強い刺激の発信源を感じてしまった。

タイムスビルの通り沿いの柱（ピラー）に、大型天描作品を飾っている大城清太さんに会った。若いエネルギーを溢れさせる時期を通り過ぎ、なにか成熟したものを感じる作品だし、本人にもそうしたものを感じてしまった。今後にますます期待したい。



幣隆太朗 コントラバス リサイタル 2016年08月09日

※幣とは珍しい姓だ。「へい」と読むのだそうだ。

誘われて、5日パレット市民劇場で鑑賞した。

陰で盛り立てる役割というイメージが強いコントラバスが、ピアノの伴奏、あるいはビオラ・フルートとの協奏で、中心になって演奏。

バイオリンの数倍以上の大きさの楽器を、まるでバイオリンのように演奏する。奏者自身が語ったように、終えた後は、3キロもやせるそうだ。そんな体育会的な動きを表にみせないのがプロなのだそうだ。

余談はさておき、演奏がすごい。クラシックの上品な雰囲気をかもしだしつつ、明るい、荘厳な、ドラマティカル、ハーモニカルといった、それ

ぞれの曲想に合わせて、底深く豊かに表現する。圧倒され通しだった。

今回フルート演奏をした渡久地圭さんをリーダーとするビューロ・ダンケが主催したコンサートだ。質の高い企画を連続して行っている。渡久地さんも若い、聴衆も圧倒的に若い。出会った知人は、渡久地さんの他は、これまた若いピアニストだけで、沖縄の沖縄愛好者の分厚さを感じた。

幣さんの沖縄でのリサイタルは、昨年が続いて二回目だということだが、ファンがどんどん増えていきそう。幣さんは、現在ドイツのシュトゥットガルト交響楽団団員で、そこでの演奏だけでなく世界のあちこちでソロ演奏を含めて大活躍だ。私が知らなかっただけで、すでにコントラバス演奏者として世界に名を馳せる演奏者だろうと推察する。

## 「巨匠たちの奇跡」「宮良瑛子 いのち」「月に向かって」

2016年07月30日

29日、久しぶりに県立美術館博物館に出かける。

「2016国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ りっかりっかフェスタ」の一つ、「月に向かって」を見るためだ。

人形劇？ 操り人形？ これまでに見たことのない不思議な世界を表現している。説明しにくい。アルミフォイルのようなもので、月、多様な人形を作り、興味津々のドラマが連なっていく。

悲劇？ メルヘン？ 喜劇？ これもわからない。何かの寓意とかメッセージとかがあるのか。それもよく分からない。受け取る人の感性で、自由に感じるものようだ。

そんな自由さと、それだけに広がりゆく世界をもつものを楽しむのが一番という感じ。

ステージも観客席も、かぶりつき感溢れる作り方。ともかく面白い。観客は、親子連れが、世界各地から多様に来ていた。満員盛況で、入れない人も多かったようだ。

リッカリッカの前身は、キジムナーフェスタ。見に来るのは、何回目になるだろうか。恵美子が熱心なので、私もつられて参加の毎年だ。

どうせ県立美術館博物館に来るならと、長期開催している「巨匠たちの奇跡 ゴッホ、モネ、セザンヌ」も見る。チケットを買おうと、「宮良瑛子 いのち」と沖縄の著名な美術家たちの作品を辿る展覧会も入場できるとのこと。まずこちらから見る。

宮良さんの作品には、本格的には30年ぶりに出会う。以前にも増して、重み深みを感じ、メッセージ性と芸術性を感じさせるものの連続だ。大作の連続だからでもあろう。

沖縄の美術家たちの作品には、かつて琉球大学で同僚であった人達も多いので、懐かしさを感じさる。比較的新しく、私が知らない人の作品も多く、沖縄美術家が層をなして量質ともに豊かになっているのを感じる。

「巨匠たちの奇跡」で展示された作品には、若いころから美術館などで出会った著名な画家のものが多い。とはいえ、

改めての発見は多い。

こうやって、ぶらっと、美術品を楽しむのもいいものだ。

## 県立博物館美術館 ゲルニカ 「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」

2016年04月02日

30日、久しぶりに沖縄県立博物館美術館に出かける。のちに書く「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」に誘われたのがきっかけだ。

それが始まる前、ちょうど開かれていたゲルニカ（タピスリ）を観る。タピスリは、タペストリーのことで、ゲルニカの絵画を織物にしたものだ。ゆっくりと2周回ってじっくりと観る。絵画の方は、いつのことか忘れたが観た記憶があるし、写真などでよく目にするが、タピスリは初めてだ。登場する人物、牛馬鳥などを丁寧に見る。

織物なので、雰囲気は少々異なるが、やはり圧倒される。

時間が少しあったので、常設展をさらっと見る。2回目だ。常設展とはいえ、模様替えが丁寧に行われており、今回は、3時間ぐらいかけて観なくては、と思う。

お目当ての「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」は、研究報告と当事者の語りで構成されている。戦前の沖縄・台湾、そして戦後の沖縄でのラジオ放送について、イメージ豊かに語られる。いくつか印象に残ったことをメモしておこう。

- ・戦前、貴重なラジオだったが、1938年頃、いくつもの小学校へ卒業生などが寄贈したとのこと
- ・1940年頃、2000世帯の家庭が視聴契約を結んでいた
- ・当時の人気番組として、1) ラジオ体操、2) 地域文化、ご当地巡り、放送劇、3) 国民歌謡（戦後の「みんなの歌」に相当）



- ・戦時下には、ラジオは回収対象になった
- ・台湾では、日本語放送と台湾語放送とがなされた
- ・戦後沖縄では、情報と娯楽との役割をになった。
- ・戦後、米軍による検閲がなされ、瀬長亀次郎報道などは抑えられた

ラジオというのは、支配者による活用・統制、人々による文化形成という二つの流れが複雑なからみあいを見せるものであることを改めて確認する。

## 経済協力開発機構（OECD）『創造的地域づくりと文化』（明石書店 2014 年）を読む

2016 年 03 月 01 日

店頭で見つけた本だ。私は、かねてから地域起こしとか地域づくりに関心をもち、そのことについて私が専攻してきた教育面だけでなく、文化面についても考えてきた経緯がある。ということで、欧米を中心とする「先進国」のこの分野についての動向を見たいと思い、読んでみた。

本書の制作経過は、次のように書かれている。

「本書は、経済協力開発機構（OECD）の地域経済・雇用発展（LEED）プログラムが、グローバル化した知識経済における文化の重要性に対して払っている関心を示している。この問題関心は、LEEDプログラムが「地域の発展および雇用の創出における文化の役割」と題して 2000 年 9 月にパリで開催した国際セミナーの際にすでに示されていた。本書が具体化した分析は、このセミナーから出発している。

創造性と文化は、個人と社会の発展の重要な挺子であり、知識社会における経済成長の強力な原動力である。「グローバル」な競争力の中心にあり、新しく創造的なやり方で地域と地域経済を作り上げる。」（はしがき p 3）

本書は、専門的経済書で、私には理解不能なところもあるので、刺激を受けた点をいくつか並べるとどめよう。

まず、大企業による大量生産大量消費という前提ではなく、多様な文化創造者たちの多様な協同という方向性を感じさせるものだ。私流にいうと、「手作り」型への志向を含んでいる。

そしてそれには、地域住民と観光客など訪問者との交流協同という方向が示唆されている。たとえば、次のように書かれている。

「文化活動は、地域の住民の需要が取り入れられれば取り入れられるほど、大きな効果を持つ。文化の潜在力を旅行シーズンの間だけでなく年間を通じて利用可能なさまざまな活動の資源に転換し、遺産全体を保存し、若干の投資ができる財政上の手段を見つけ、ボランティアを動員し、地域全体の荒廃を防ぐための結びつきを生じさせることは、地域住民とコミュニティのことを考慮すると同時に、彼らの参加を必要としている。逆に、地域が博物館・美術館化することは、持続可能な開発をまったく保証しない。」 p 120

この記述の後に、日本の金沢の例が出されている点でも注目される。

そして、本書は経済・雇用に焦点化されているが、その際に、地元住民参加が重視されている点が注目される。

また、経済的に言うと、大人口を抱えた都市が有利になると述べるが、それでも、田園地域での取り組みにも言及し、その例として、「エコミュージアム、インタープリテーション・センター、エコノミュージアム」などを登場させている。そのなかの、エコミュージアムについては、次のように書かれている。

「エコミュージアムは、象徴的な記念建造物の中で家具や調度品などの収



集品を展示することによって、民俗的、職人芸的、あるいは産業的な遺産に焦点を当てることを目的としている。次の3つの要素がその発展を導いた。」p99

ところで、これらの事例は、フランス人研究者の執筆によることもあってか、中心的には欧米における歴史的蓄積を反映している。

それに対して、沖縄や日本の田園地域における「地域起こしと文化」をどう展開していくのかは、当事者の創造の課題だといえよう。

## シュガーホールオペラ「あちゃーあきぬ島」観劇 大坪さん、丹野夫妻との出会い

2016年02月29日



27, 28日と、シュガーホールでは、オペラ「あちゃーあきぬ島」を上演。折しも、北海道の霧多布から来沖したカメラマンの大坪さん、そして琉球大学に昨年赴任した丹野夫妻といっしょに、27日に観劇した。

大坪さんは、1990年代前半に中京大学で、私のゼミに参加していた。その後も偶然が重なって、愛知で出会い、2004?年には、霧多布で出会った。その後も、NHKテレビで彼の画像が登場した際にも、メールの出会いがあった。

以前から研究会で出会い、霧多布訪問のきっかけをつくった丹野さんが大坪さんと勤務先の小学校で旧知だ

という偶然もある。その丹野さんが結婚した清彦さんとは、もう30年以上の旧知だったが、結婚して昨年琉球大学に赴任となる。昨年、琉球大学で出会い、話を聞いた時には、驚いた。3人とは全く別々の出会いだったのが、偶然が折



り重なって、つながってしまった。

その偶然で積み重なった再会が、シュガーホールオペラの日だった。ということで、ご一緒したのだ。

オペラの私の印象いくつか

- ・シュガーホールで、本格的なオペラが上演されたこと自体が素晴らしい。何度かの町民・市民ミュージカル、その集大成でもある「太陽の門」、そしてシュガーホールオーケストラ、20回を越えた新人演奏会などをはじめとするこれまでの20年余りのシュガーホール史の蓄積が大きく花開いたといってもよいだろう。



- ・歌手の多くは、新人賞受賞者、そしてシュガーホール舞台を作ってきたベテランたちだった。そして20人近くのジュニアオーケストラが、地元作成の新鮮さを際立てた。

- ・さらに、二人の三線奏者を含めた演奏したアンサンブルの皆さんも、シュガーホールに深いつながりを持つ人ばかりだ。

- ・これらを作り上げた台本佐藤信、指揮大勝秀也（シュガーホール前芸術監督）、演出中村真理、舞台美術衣裳デザイン荒田良、振付・沖縄語指導佐辺良和さんたち。

- ・そして作曲の中村透。かれの「うん十年」の作曲史の巨大な蓄積が結晶している。

- ・これら全体が、すごく響きあうものだった。聞けば、前日までの相当な練習・リハーサルの積み重ねがあったようだ。

- ・加えて、プロデュースした、シュガーホール・スタッフたち。

私は、単なる観客で何もしていないが、少しだけシュガーホールにかかわっているものとしては、なにかしら、喜びの分け前をいただいた感じだ。

この後、シュガーホールの更なる展開には、どんなドラマがついてくるのだろうか。

写真は、富祖崎あたりから見たシュガーホールと南城の丘

## じかに触れ考え行動して創造する博物館へ 博物館本をいろいろと読む

2016年02月19日

このごろ、文化分野の本を読むことが多い。博物館についての3冊の本も読んだ。

私は、各地に出かけて時間があると、その地にある博物館に入ることが多い。博物館といっても、美術館・水族館・動物園・植物園・工芸・民芸品展示施設・科学施設なども含まれるので、実に多様だ。それらはいずれも好きで入ることが多いが、「博物館」と思って入るのは、歴史関係のことが多い。

そこでは、考古学遺物から始まって、文献史料・仏像などの展示品があり現代にまで至るものが多い。時には人類史・地球史にまで遡るところもある。展示物には説明札がついているが、実物を手に触れることはできない。なかには、十年以上も展示が変わらず、古色蒼然としているところもある。

いずれにしても、入館者は少なく静かだ。展示物をじっくり見るという感じだ。再度出かけることは稀だ。といっても、その地域を知るうえで有用な情報が多いので、地域をまわる前にしろ後にしろ、立ち寄って地域学習をすることが多い。



そんなイメージがくつがえったのは、1990年代に出かけたカナダの施設だった。ガラス越しに見る展示物だけでなく、触って実感する、制作場面を見せる、といったように、入場者が「参加」するイメージが濃厚なのだ。しかも、若い世代が多いのだ。日本だと、大人が中心で、若い世代は学校の遠足などで「連れてこられた」感が強い。

2000年代に入ると、日本でも少しずつ変化が見られるようになった。しかし、財政難もあってか、あるいは固定的イメージが強すぎるためか、改革がすすまず、入場者ギリ貧になっているところも多い。

しかし、大胆な改革が進んでいるところもある。

そんななか読んだ本は、次の通りだ。(写真)

こどもくらぶ編『日本のミュージアム』同友館2005年

東北産業活性化センター「地域の文化資本」日本地域社会研究所2007年

浜田弘明『博物館の新潮流と学芸員』御茶ノ水書房2012年

読むと、わくわくするような事例があり、訪問したくなるようなところも目白押しだ。

私がまだ訪問したことがないところでいうと、

琵琶湖博物館 旭山動物園 朝日町エコミュージアム まちかど博物館 民族学博物館 歴史民俗博物館

それらには、新たな試みで話題になっているところが多い。それらでは、情報を伝えて、入館者を啓蒙することに留めず、体験を通して、入館者とともに共同創造するという方向につながっているようだ。そして、過去を振り返るだけでなく、未来創造につなげようというものだろう。

財政難の事態の中で、淘汰されるか、このような方向へと向かっていくか、厳しい選択に迫られている博物館が多そうだ。それは、博物館に限らず、シュガーホールのような文化施設全体にかかわる問題だろう。バブル景気もあって1980年代から90年代にかけて創られた文化施設が共有する課題だ。その点では、シュガーホールは見事な活動を展開していると評価されようが、油断はできない。

## NHKあさイチに映っていた?! NHK交響楽団メンバーのコンサートを聴く

2016年02月08日

八重山旅から戻り、徐々に「何もない」日常にもどってきた。「何もない」日常は、畑・散策を織り込みながら、読書と執筆活動が中心だ。

そんななかのニュース。

先日の卓球練習の時に、「NHKあさイチに出てたでしょう」と言われた。だが、全く心当たりがない。「斉場御嶽で夫婦で映っていたよ」とのこと。見間違いだろうと思った。ところが、3日前に、別の人から、同じことを言われた。今度は濱川御嶽あたりのことらしい。

夫婦で話しても、なかなか思い出せなかったが、確か1月2日に新原の人たちと一緒に近辺の聖所をまわったし、その時に濱川御嶽やヤハラヅカサも回った。そういえば、どこかでテレビ撮影もしていた。NHKだとは全く思わず、どこかのだれかが撮影しているのだろうぐらいにしか思っていなかったし、自分たちがとられていることは気づいていなかった。

NHKのホームページで、あさイチをみると、1月21日の番組で、沖縄関連を取り上げている。そこで放映されたのだろう。

そういえば、昨年11月の小谷マーイで、バーキの竹製品を購入している場面を撮影されているのは気づいたが、それが民放で放映されるとは思わなかった。

だから、双方とも、私自身は見えていないし、どんな風に映っていたのかも知らない。

もし見た人がいたら、教えてほしい。

最近の私のテレビ登場はこんな類ばかりだ。2～3年前にも、卓球の試合、そして孫を那覇空港に迎える時が、ニュース番組に出てしまった。

NHK話の連続になるが、7日午後は、「NHK交響楽団メンバーとなかまたち」の室内楽名曲コンサートをシュガーホールで鑑賞した。満席御礼状況だった。ネームバリューが多数の観客を引き寄せたようだ。馴染みのある曲がいくつもあって、楽しめた。小学校の学芸会で演じたときの音楽で、聴くたびにジーンとくるのが、サン＝サーンス「白鳥」であることに気づいた。

会場では、よく会う知人だけでなく、30年ぶりのかたなどにも出会う。

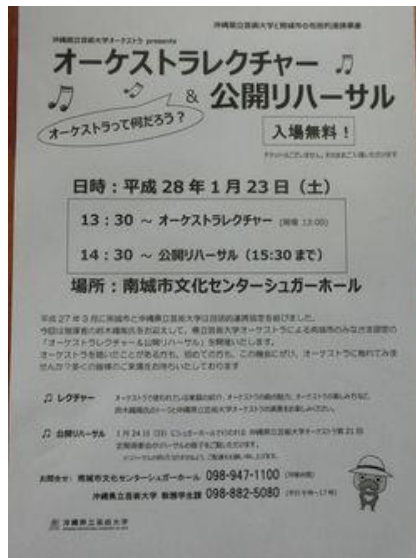
なぜか、こんな出会いが多いこのごろだ。丁度いま、60年間近くの知人が、長期に我が家近くに滞在している。このコンサートにも誘い、コンサート後は佐敷上グシクを案内した。

八重山での45年ぶりの出会いをしたのもそうだ。久しぶりに会う人は、退職して自由な生活を楽しみ始めた人が多い。

次の出会いを楽しみにしている。







ます盛況な感じだ。開場前にはすでに

100人ぐらいの行列。「新世界より」を中心に多彩な曲で構成。かぎやで風、ソプラノ、チェロ、ポップな曲、芭蕉布・・・(写真はプログラム)

30年ぶりの方にも出会う。

みなさん、充実感に溢れていた。

シュガーホールは、次々と魅力的な企画の連続 いくつか並べよう。

2月27, 28日 オペラ あちやーあきぬ島 (南島幻想曲) シュガーホール制作 チケットは購入済みだ。

1月23日 オーケストラレクチャー&公開リハーサル 県芸オーケストラ 面白い企画なので、出かけてみようかなと思う。翌日は定期演奏会

2月5日 下里豪志ピアノリサイタル シュガーホール新人演奏会で優秀賞を取った若手だ。

他にも目白押しだ。

## 730バスで行くなんじょう音楽ゆらり旅 ほかたくさ



ん回った21日

2015年11月21日

今や南城の諸企画が花盛り。この連休はそのおっかけで大繁忙

21日のメインは、730バスで行くなんじょう音楽ゆらり旅 南





城を730バス  
で一周しながら、途中乗車する音楽家3人の演奏を聴くというぜいたくな企画  
進行 平田美智子



ギター&歌 赤木一孝

アコーディオン 平良優子 ピアニストがアコーディオンで  
唄三線 福治充広

1時間30分が充実していて、あっという間 楽しいそのもの。



22日も23日も  
ある。安座間サン  
サンビーチ集合  
参加費無料が信じ  
られない

I s l a n d A  
r o m a  
OKINAWA 訪  
問 (左写真)



久手堅の大アカギ (右写真)

こらくりアーツ展覧会 in 安座真見学 先週制作作品の展示 (私たちのものも) (左写真)



インド・ネパール料理 カマルで昼食

オープンガーデン連携のガーデニングフェスタ ユインチホテル

明日・明後日は、オープンガーデン、スクガーマーイ、小谷  
マーイ・・・

尚巴志マスタープラン事業『ゆうゆう風吹く音楽会～文化遺産めぐりコンサート～』2015年11月20日

「南城2013～2017年」に掲載済み

## コラクリでのデザイン・織への挑戦 半島芸術祭

2015年11月17日

15日は、「こらくりワークショップ」に参加。県立芸術大学の大学院生による、彫刻・絵画・デザイン・陶芸・染・織のコースがある。私は、未体験のデザインと織に参加。恵美子は、染・織・絵画に参加。



苦戦しつつも、楽しみながら制作。

制作作品は、16～23日に安座真ムラヤーで「南城市こらくりアーツ展覧会 in 安座真」で展示される。

参加者は市内小学生の親子が圧倒的に多いが、私たちのような老人夫妻



参加も彩を添えただろうと勝手に思う。

その後、半島芸術祭。第八回ということだが、第一回第二回は我が家も会場だった。その後、多分全回参加だと思う。



最近、新しい所気になる所に絞っている。今回は、木創舎会場での3つの企画とのんとみ工房を訪問した。いずれもよく知った方なので、ゆんたくがはずむ。

のんとみ工房は、元芸大の型染の先生が作成する芸術品。毎年新作が加わる。いつか、我が家にも飾りたいねと恵美子と会話。飾るとなれば、我が家の美水準をあげなくてはならない。

今週から来週にかけても企画が目白押し。オープンガーデンもあるし、木創舎主人の城間さんが案内する「幻の村(スクガー)」マーイ(21, 22, 23, 28, 29日)も是非行きたい。

「730バスで行くなんじょう音楽ゆり旅」(21, 22, 23日)もいい。

シュガーホール「とら・とろ・ぴあコンサート」

2015年11月14日

「南城2013～2017年」に掲載済み

## 南城青年芸能祭

2015年09月23日

夕方から恵美子とともに、南城市青年芸能祭に出かける。グスクロード公園だ。後半だったので、エイサーが中心だった。



青年中心だが、子どものエイサーもあった。生き生きと輝き、あかるい笑顔が連なる楽しい時間だった。写真を何枚か紹介しよう。



## リッカリッカ・フェスタ

## オープニング

2015年07月29日



27日夕方、国立劇場おきなわで、開かれたオープニング公演と開会パーティに参加した。

これまでのキジムナーフェスタを模様替えし、東京と那覇新都心を中心に多彩な企画が目白押しだ。正式名称は、「2015国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ」。

はじめに、舞踊劇「炎の鐘」。「執心鐘入」が、想定外のアレンジで展開する。とても魅きつけられた。美しさとドラマ展開の面白さ。舞踊と照明と音楽、これらのからみは面白い。

どこかで、繰り返し再演されることが期待されよう。

その後、オープニングパーティ。世界各地からの方々が参加。日本語・沖縄語・英語・ハングル語など、言語も多様だ。実演家も多いし、演劇の専門家も多い。挨拶も楽しい。

(写真は、パーティ風景)

プログラムは充実している。多くの方々を楽しませてくれるだろう。

何人かの方が発言していたが、青少年・児童演劇にかかわる世界でも有数のフェスタだろう。随一かもしれない。

シュガーホール 市民のための企画・運営講座／受講生の募集 2015年07月20日

「南城2013～2017年」に掲載済み

シュガーホール新人演奏会 2015年05月26日

「南城2013～2017年」に掲載済み

クラフトフェア南城 2015年05月02日

「出会い・集い2007～2015年」に掲載済

与那原恵『首里城への坂道——鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』筑摩書房 2013年を読む 2015年05月02

日

「沖縄の歴史・民俗2013～2017年」に掲載済み

## 新人演奏会 沖展

2015年03月25日

22日 シュガーホールの新人演奏会オーディション。日程の都合で、終了後のレセプションに付き合う。主催者や審査員、そして若手演奏家・伴走者など、少しずつだが、知り合いが増えていくから、耳学問の楽しみになる。

興味深かったのは審査員講評。さすが音楽家の話し方は、芸術的で個性的だ。論理性というよりは、講評をいかに芸術的に語るか、という雰囲気も漂う。

新人演奏家たちは、技術的には優れているが、それをさらに高めるためには、会場・聴衆とのコミュニケーション・やり取りをいかに豊かにするか、それが重要なのだ、という指摘に注目した。さらには、呼吸も、一つの呼吸ごとに、表現に結びついて変化させていくこと、体幹トレーニングが重要なことなど、かなり多様な注文が続出。なかなか面白い。

5月の発表会の演奏が楽しみだ。

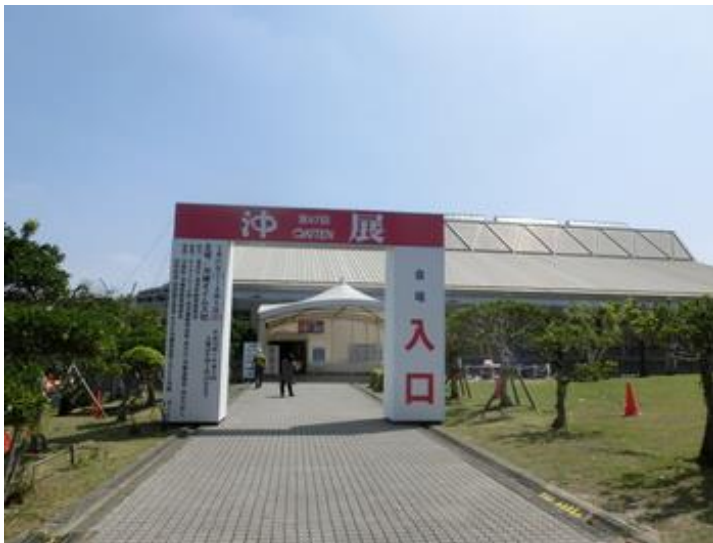
23日 沖展見学。3年連続の鑑賞。知っているかたの展示が増えてきた。

ベテランの域に達している人のものは、ゴテゴテしているものを除き、すっきりと美しく深みをだしている、という印象だ。それは、絵画、彫刻、陶芸、染織、写真などの分野を越えて、共通している。

鑑賞後、20数年ぶりに浦添城址に行く。そのころは修復作業中だった浦添ようどれも見学。

浦添の町もずいぶん変わって、すっきりと美しくな

った、という印象だ。



## 南城市文化センター・シュガーホール運営審議会

2015年03月13日

「南城2013～2017年」に掲載済み

## わらび座公演「笑いはつづく」小那覇舞天の物語を観

劇

2015年02月01日

31日シュガーホールで開かれたわらび座公演「笑いはつづく」小那覇舞天の物語を観劇した。

公演終了後に感動演技の主演安達和平さんが出口で挨拶をしておられたが、「わらび座とは、40年余りの付き合いですが、ずいぶん沖縄に馴染んできましたね」と思わず語りかけてしまった。

わらび座の観劇は、10代後半からだから、40年の付き合いでなくて、50年ほどになるだろうか。日本文化を民衆生活から描いている点で、私には強烈な印象であり、日本文化への新たな見方を発見させてくれた。新たな見方というよりも、長く埋もれがちであったものを掘りだし見せていただいた印象だった。

沖縄公演の最初は、1970年代前半那覇市民会館で見た。そのころは、わらび座が持っているものと沖縄文化とをどうかみあわせるか、苦勞しておられようで、ぎごちなさを感じた。ところが、いまや、すっかり沖縄に溶け込んだ表現になっていた。無論、5名の出演者のうち、ウチナーンチュが3名ということもあるだろう。そのうち一人は、井上あすかさん。小学生のころから知っているが、もう一人前の演技者だ。今後がおおいに期待される。

小那覇舞天の物語だが、何年か前に石川で彼の展示でいろいろと知る機会があって以来、戦後の彼の活躍に関心を持ち始めた。戦後沖縄の文化芸能で、かれが果たした役割は大きい。そんな彼の戦前の物語が、笑いにつつまれつつも、わらび座らしく社会派的に描かれていたが、戦後を描くとすれば、どんな風に描くのだろうか。

舞台表現は、40年前ほどとは段違いのものなり、演技、踊、歌、舞台装置照明など、実に多角的な表現形式を駆使しながら、素敵なものになっていた。ヤマトとウチナーの対立葛藤、戦争と命なども興味深い掘り下げがあった。こうしたことに、舞天が活躍した芸能の世界がどう位置づくのだろうか。彼は、教育界をへて歯医者になり、かつ芸能の世界にも入り込んだ、いわば社会的リーダーだ。

かれをどう評価するのか、大きな研究課題でもある。



感動のシュガーホール・ニ  
ューイヤー・コンサート

2015年01月12日



今年で3回目だ。年々進化している。より多くの方に味わっていただきたいと思う。遠方からも聴きに來る価値があるものになっている。

曲目は、パールギュント、Let it Go、芭蕉布、序奏とロンド・カプリチオーソ、「イタリア」とぎっしり。オーケストラ演奏がメインだが、そこに、合唱・独奏が加わる。

私の感動をいくつか並べておこう。

- ・指揮者 松沼俊彦さん 情動と身体の動きと指揮とがからみあっている オーラを放っている
- ・オーケストラとともにヴァイオリン演奏した藤原晶世さん 昨年のシュガーホール新人演奏会グランプリ獲得。素人の私にはよくはわからないが、今後一層すごくなりそうな予感。
- ・オーケストラの個々の演奏者の主張が聞こえるとともに、絡み合うハーモニーが響いてくる。
- ・親しみのある曲目が、生のかぶりつきで聴ける幸せを感じる。迫力満点で、私は興奮状態で帰宅
- ・中村透さんがノリまくっている。
- ・聴衆の年齢幅は、60～70歳ぐらいか、各世代ともに演奏に圧倒されている。
- ・かぎやで風。三線とオーケストラのマッチングが熟しはじめている。相互の応答が始まっている。これからのさらなる進化が期待できる。
- ・たくさんの中学生在がボランティア活動。印象的だ

前ページ写真は、開演前のシュガーホール

## 恵美子も演奏したピアノ Concert

2014年12月01日

30日夕方、スタジオT. tuttiにて、ミュージックハウス・ノエル（神谷智子主宰）&音楽教室【一期一会】（大湾朝子主宰）のコンサートが開かれた。恵美子を含めて大人3名と、両主宰者の歌で、こじんまりと家庭的雰囲気の中なかで、まさにコージーな会だった。3人ともはじめは緊張していたが、後半は素晴らしい演奏だった。恵美子も、いつも練習中に聴いているよりも、ずっとよかった。

子どもの時の練習を再開した人、定年後始めた人、とても熱心にやっておられ、すごい上達速度のようだ。

恵美子は、一曲目は神谷先生との連弾、二曲目は「小さな嘆き」をソロで弾いた。



## 糸数城址でグスクめぐりコンサート

2014年11月20日

「南城2013～2017年」に掲載済み

## 半島芸術祭訪問記2

2014年11月17日

16日は、隣人とともに3人で4か所をまわる。

まず、カフェヤブサチでのhapp出張ワークショップの似顔絵描き。県立芸大生が描く。屋外企画だが、なかなかの盛況で順番待ちだった。私たち二人と隣人も描いてもらって、記念撮影。楽しい時間だった。

もう一つの企画「機織り工房tate+yoko」は、カフェの店内で少々鑑賞しづらかった。というのも、順番待ちがある満員の店で、食事なしで中に入るの、少々遠慮の気があったからだ。しかも、食事している方々に接した壁などに飾ってあるので、超短時間鑑賞であきらめるしかなかった。作品は魅力なものだっただけに、余計に残念だった。

次に「なかんだかり陶糸」(下左写真)

シーサーを中心にしたヤチムンとカフェだ。ここは、なんととっても最高の景観がウリだ。景観写真は別の記事で紹介しよう。



次は、金城陶器秀陶房(下右写真) 以前から気になっていたが、初めての訪問。壺屋生まれ育ちで、金城次郎の一族の方だ。40年前に私が買ったものもその中のお一人によるものだ。西原に住んでいた時に立ち寄った「沖縄陶器」





で仕事をされていた金城次郎のおとうとという方も、お一人のようだ。いろいろとつながる。

作品は、しっかりしたものばかりだ。壺屋の流れをしっかり踏まえつつ独自の世界を築いておられる。ジョッキ風のを一点購入した。

最後は、我が家の近所の「草木染ぶーら」(左写真)

西表で長くやっておられ、最近玉城字玉城を拠点にして活躍。魅力的な手創り服が並ぶ。男性向けが少ないのが残念。いつか、いいものを狙おう。「ぶーら」とは、エスペラント語でpureのことのようだ。

## 半島芸術祭 in 南城 工房訪問記 1

2014年11月16日

もう第7回目を迎える。第1、2回目は、恵美子たちも企画して、我が家が会場になった。そのころと比べると、ずいぶん変化した。昨年あたりから、工房自身が中心になって企画運営が進んでいるようだ。会場案内をみると、1、2回目当初からずっと引き継いで開催しているところも多いが、新しく参加しているところも多い。半分近くが入れ替わった感じだろうか。

1回目はすべての会場を回った。それ以後は、新しく参加した会場と話題性につながりが多い会場を訪問することに絞っている。それでも、今年は、未訪問の所が多い。飲食提供だけという所は遠慮して、未訪問の所を中心に10カ所ぐらい回る予定でいる。

15日訪問したところを並べておこう。10時からまわったので、まだ開いてないところがいくつかあり、予定とはちょっと変わった。

金城幸彦邸臨時ギャラリー (写真展示)

TIDAMOON (紅型雑貨、食堂)

高原の駅 なんじょう (写真展示)

ノカオイ ファインアートギャラリーラリー (かりゆしウェア)

亜+m+E glass (ガラス女子 三人展)

金城幸彦さんの写真は、花と虫がテーマだ。素人では決して取れないミクロな世界を美しく切り取ったものだ。撮影対象は、いつも見慣れているものだが、このように不思議感を帯びつつ美しい写真を見ていると別世界のようだ。



TIDAMOON（前ページ右下写真）は、331号線の久手堅から伊原方向に入ったところにある雰囲気のあるレストランで、紅型の小物をはじめとする地元作家の工芸品が沢山展示販売されている。食事もいただいたのだが、中華をベースにしているが、洋風の雰囲気もあり、なかなかの味だ。リピーターになるかもしれない。

その近くから、クルクマや木創舎方面へと抜ける道を教えてもらい、通ってきた。10年以上前からあるとのことだが、私は初体験だ。

高原の駅では、写真を見つつ野菜を買う。



垣花のいつも通る道で、白い新しい家が、以前から気になっていた。それがノカオイ ファインアートギャラリーだ。ハワイアン風のデザイン画とかりゆしウェアの展示が中心だ。ここでは話がはずんだ。3匹のダルメシアンが一緒だ。ダルメシアンを飼っていたかつての友人を思い出す。話が進んで、ウクレレでの夫妻の歌を聴く。楽しいところだ。



夕方散歩を兼ねて訪問したのは、亜+m+Eglassだ。奥武島入口の「くんなとぅ」の隣だ。従来の琉球ガラスとは異なったタイプの高級感あふれるガラス工芸作品だ。謙虚な美しさが、人の気持ちを高貴にさせつつ動かさずといった感じ。



## オンチが音楽を楽しむには 私と音楽

2014年11月06日

私は、オンチ、学術的にいうと「調子はずれ」だ。小学生のころから、それでずいぶんと苦しみ、たくさんのエピソードを作ってきた。

それでもなお、音楽に挑戦し、音楽に触れ楽しむ機会を結構もってきた。その結果、60代になってようやく、自分がオンチであることを確認できるようになった。外れた音を出した際に、「外れたな」と気づくようになったのだ。といっても、上にか下にかといったような外れ方は分からない。

その私が、なんだかんだとって、音楽と付き合ってきた。極めつけは、音楽専用ホールであるシュガーホールの運営審議会会長を務め、沖縄県立芸大大学院で音楽に関わりのある沖縄教育史の授業を担当したことだ。

そこで、私流の「オンチが音楽を楽しむには」について書いてみようと思う。

1) 私の場合、音楽を聴覚を通して楽しむ点で大きなハンディがあることは確かだ。そのハンディを補うために、いろいろなことを動員する。

楽しむ際に、その音楽についての情報を入手して補う。たとえば、コンサートの際の配布されるパンフレットは、できるだけ丁寧に読む。シュガーホールが開催する「オーケストラを科学する」のような企画を生かす。音楽を楽しむための本を読む。このブログでも紹介したことがある。

2) 音楽に強い人と友達になる。こんな私が音楽とつきあうのを促進した張本人は、中村透さんだ。出会いは40年近く前になる。かれは、コンサートや音楽企画に誘いまくってくれた。それ以来、いやおうなく音楽とつきあってきた。私の音楽との付き合いの半分は彼のおかげだ。

他にも、いろいろな人が私を誘ってくれた。これまた40年近く前の話だが、声楽家の城間繁さんの誘いで、本人が出演した組踊を観たのが、組踊との付き合いのスタートだ。

若い演奏家・音楽教育者もいろいろと誘ってくれる。最近でいうと、三島わかさんが誘ってくれる。琉球音楽でも誘ってくださる方が多い。浅野恵美子の誘いも大きい。最近では恵美子のピアノの先生の神谷智子さんの誘いもある。

3) 少しだけやってみる。これまでやったものとしては、合唱（小学校音楽部、中村透担当「音楽通論」授業、中山合唱団）、ハーモニカ、アコーディオン、ピアノだ。楽器は、自分で調弦しなくてもいいものばかりだ。

そして、重要なことは、深入りしすぎないことだ。合唱では、私にしては深入りして大失敗エピソードを作りすぎた。

4) 音楽を楽しむ場で、音以外のものに興味をもって接すること。私はコーディネイトや演出が好きなので、その視点から音楽を楽しむ。それは、創作とか手作りとかの色彩が濃い「職人的仕事」が好きだからでもある。

音楽の時代背景、社会的背景、人間関係、場の設定などに関心をもつこともそうだ。

## 新崎誠実&amp;新崎洋美ピアノ・デュエットリサイタル

2014年08月19日

17日午後、シュガーホールで開かれた。

お二人を存じ上げていたし、以前にも演奏をお聴きしたことがあるので、親しみを感じた。今回は、その二人のデュオ、つまり連弾なので、ソロとは異なる魅力があった。

思い浮かんだ印象を並べよう。

・演奏曲が、冒頭のビゼー「子どもの遊び」のように、私のようなずぶの素人に馴染みやすいものが多かったので、構えることなく曲に入り込めた。

・一つのピアノを4本の手で弾くことになるので、迫力・厚み深みが豊かになり、一層ドラマ的になる。

・素人の私にも少しはうかがえた、二人の連携が興味深かった。演奏合間の二人の会話なども面白い。二人の姉妹の楽しくエネルギーなやり取りが、ソロにはない世界を作りだしているようだ。

・聴衆は、馴染みのない人がほぼすべてだったが、それだけ沖縄各地にピアノに馴染んでいる人たちの層が厚くおられるということだろう。私のような、ピアノを弾くどころか聴くこともままならない、ずぶの素人が、こうしたコンサートにも馴染むような配慮がうかがえた。より多くの層へと広がることを期待する。

・子ども向けのわかりやすい「ミニブック」(写真)が配布されていた。私にも役立つ。お二人のいろんな心遣いをいっぱい感じるコンサートだ。



## 「オムツ党走る」 こんな面白いものを見るのは

久しぶり

2014年08月04日

2日(土)、国立劇場おきなわ 小劇場で観劇。

「老い」の問題という、難しく重いことを、とにかく楽しく面白く、深みをもって表現。

・開場前から長い行列。並ぶのがいやな私は、すぐ横で催されていて田里朝直展を見たあとで、入場。開演30分前なのに満席状態。空いていた一番前のかぶりつき席に座る。

- ・観客は、私が平均年齢ぐらいか。50代～70代が多いが、圧倒的に女性。なんでだろう。
- ・有料老人ホームが舞台。登場する老人は、80代から90代初めの女性4人プラスアルファ。なぜか男性がいない。男性がいると、もっとややこしくなるかもしれないが。老人たち相互のやり取りと、職員とのやりとり、さらに家族とのやりとり。
- ・役者は、パワー溢れる40～50代の実力者たち。恵美子の教え子でもある、いずみ&やよいも、大活躍以上。みんなともかく上手い。ほとんどがウチナーンチュだ。
- ・ウチナーグチ満載だし、地名や施設名なども、身近なところばかり。観客との呼応をぐんと盛り上げる。これが新しいウチナー芝居になるかも、などと思ってしまう。
- ・舞台上の威勢よい生演奏で、元気よくコミカルな舞台を進める音楽。時には、介護職員として演ずる。
- ・陰鬱になったり、ただ時間が流れるだけに陥りがちな状況を、明るくコミカルな元気で進めることが、こうした場で生きる高齢者への強いメッセージになるのか、それとも、まだ向老期にある元気な60代から70代前半へのパワフルなメッセージになるのか。
- ・途中で、ここに生きる老人たちの気分に馴染んでしまっている自分にハッと気づくこともあった。
- ・こんなに楽しく印象深い舞台を安価で提供してくれた関係者に感謝したい。
- ・満席になるほどの会場をみると、沖縄の文化芸能への強い期待が広い底辺で支えられていることを感じる。

## クラシックコンサート観客数の増減 シュガーホール新人演奏会

2014年07月26日

来年の第21回シュガーホール新人オーディションと演奏会の概要がまとまりつつある。10月になると、募集がスタートする。そして、これまでの受賞者による「出前授業」が南城市内の全小学5年生を対象に行われる。

これらについて審議する際、観客数の増減が話題の一つになった。シュガーホールが満席、ないしは満席に近くなる年と、そうでない年とが、なぜか隔年現象になっている。理由は正確につかめるわけではないが、地元出身者がグランプリなどの受賞者に多いと、増えるということだ。

身近な演奏者が登場すると、出かけるということは、出演者が幼児・小学生の時は、大変多いとのことだ。中学生、高校生と進むにつれて、減ってくるらしい。

聴くのを楽しむことに加えて、身近な人を応援する気持ちが、ホールに出かける強い動機になっているようだ。

話は変わるが、シュガーホール新人演奏会をはじめ、沖縄では多くの優秀な演奏家を育てている。その人たちがプロになると、活躍の場は、東京とか海外とかになり、沖縄に戻る人はそれほど多くないようだ。プロとしてやっていける条件が十分でないことによるようだ。

その点では、シュガーホールをはじめいくつかのホール、そしてそのホールを使用する地元演奏家たちの活躍は貴重だ。そしてもっともっと活躍できる条件を、演奏家だけでなく関係者、そして住民が作り上げることが期待されている。その点で、最近、若手演奏家たちにそうした組織を自前で作り上げる動きが出ていることは喜ばしいことだ。

クラシック音楽以外では、沖縄芸能やジャズなどの活躍が目立つ。さらに、ジャンルを越えてそれらが交流合作し合う動きも注目される。

大都市地域以外で、これほど音楽活動が活発な地域は珍しいといえるほどだろう。さらに、沖縄では、鑑賞するだけでは飽き足らずに、自らが演奏する動き、そして、身近な演奏者を応援する動きがとても強いように思う。だから、多様なジャンルのコンサートが毎週のように、いやそれ以上に、週に何回も開かれている。音楽愛好者は、月に何回も出かけているが、それでも需要を供給が上回っているのかもしれない。

しばし前までは、音楽との縁がとても少なかった私にも、最近では、月に数回のお誘いがあり、結果的に月に一回近くでかけるようになっている。

音楽に縁の薄い人が、そして私のようにオンチな人が、音楽を楽しむことについて考えてみたくなってきた。少しは考えを深めて、「オンチが音楽を楽しむ方法」について、何回かこのブログの書いてみようか、という夢を持ち始めた。

#### 琉球語賛美歌論シンポ

2014年06月30日

「沖縄の歴史・民俗2013～2017年」に掲載済み

#### シュガーホール開館20周年記念国際音楽祭式典・コンサート

2014年06月09日

「南城2013～2017年」に掲載済み

#### シュガーホール新人演奏会

2014年05月27日

「南城2013～2017年」に掲載済み

#### 続々クラフトフェア 真境名照子さんのウージ染大作

2014年04月25日

今回のクラフトフェアで、手に入れた最大のもの。ウージ染。つまり、サトウキビを使用した作品だ。作者は、「アトリエちいばっぱ」の真境名照子さん。沖縄県工芸振興センター出身のプロ作家であり、「同窓」の小川京子





さんや城間光雄さんたちと深いつながりがあるという。我が家にある三つの大作は実は、この三人によるものだ。一枚板の大型書斎机、大型クバ壁飾り、そして今回のウージ染。偶然というより、どこかで惹きあうものがあるのだろう。

200×90センチという大きなものなので、どこに飾るかで苦労するほどだった。

前ページ写真が全体のもので、右写真は、部分拡大だ。

数年前、瀬長島にあるウージ染の展示即売所で魅せられて、タペストリーを購入したのがはじまり。それが少し色褪せたので、真境名さんに工夫をお願いした。

我が家には地元作家たちの作品が増えてきている。



## ふくろう 湯呑 続クラフトフェア 2014年04月22日



今年のクラフトフェアの作品は水準が高いものが多い。芸術水準で日常使用するもの、といった感じだ。ある来場者が「日用のものを安価に大量に買えることを期待してきたが、そういう感じではない」と話していたと、ある出品者が語っていた。そうかもしれない。でも、かといって高くはない。日用のものの中に美

しさを感じるという生活を楽しみたいものだ。

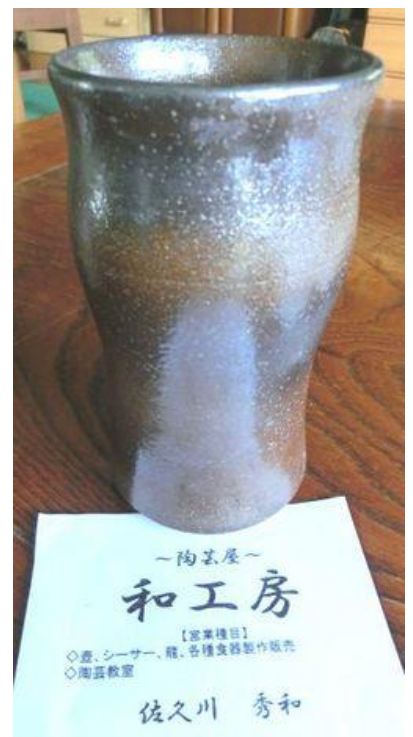
右写真の湯呑は、美しいだけでなく、手で持つところにふくらみがあっていいな、と思って購入した。2000円ぐらいだと思ったが、1300円と聞いて、少々驚いた。浦添の和工房



またもや、ふくろうを見つけ、買ってしまった。もう50点ぐらいになるだろうか。

二宮金次郎のように、読書するふくろうだ。アイデアがいい。糸満の工房 sen

左写真のなかの左側に写っているものをどなたかからいただいた。な





なかなか面白いのだが、どこで作っているかわからなかった。会場で見つけて、右側のカップルを買う。3人家族?仲間?にしてあげたというわけ。上を向いているのが面白さを増している。豊見城の陶工房みちこのみ

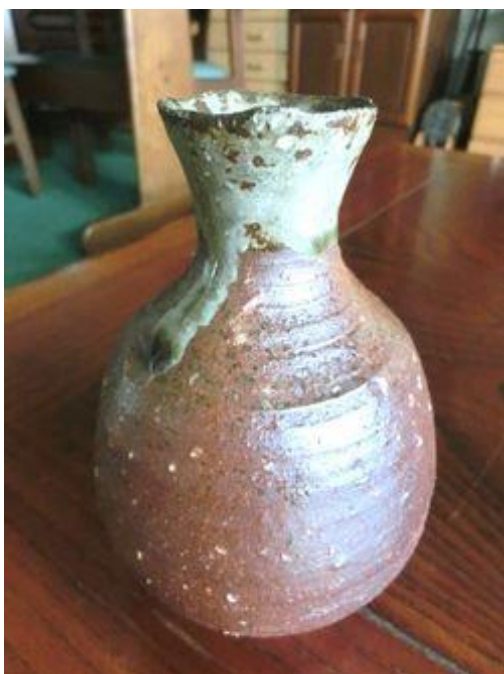
## にぎわうクラフトフェア 知り合いも多いが、初対面のクラフトも多い

2014年04月20日

19日昼過ぎに訪問。我が家から徒歩で3000歩30分足らず、いい散策コースだ。会場の玉城体育館は、数年前までの私たちの卓球練習場で、毎週通っていたが、その後はこうした行事の時だけだ。

たくさんのコーナーにたくさんの人が集まり、結構一杯している。半島芸術祭だと、南城市内だけの工芸家が出店するが、クラフトフェアだと、市外からの出店も多く、初めて出会う工芸家も多い。

会場では、音楽コンサートも並行している。なんと、恵美子のかつての卒業生の佐久本さんが、世界の音楽を演奏している。恵美子は聴き入っていた。私は彼のグループを初めて聴く。ここで演奏するだけあって、うまい。中高年の心を揺さぶる。



会場では、全部回る。かねてからの知り合い何人もとユンタクもする。いろいろと買ったが、なんと隣人の玉城焼を購入(左写真)。作品が渋くなって高級感が香る。近所だから、散策ついでに購入すればよいのだが、こんな機会に買うのもいいだろう。

カップルの雅代さんお手製の新聞紙バッグに入れてくれる。雅代さんは、我が屋玄関のシーサー作者だ。



## 渡久地圭フルートリサイタル「ウィーン風の風 Vol2」

2014年04月15日

13日午後、シュガーホールで開かれたコンサートを聴きにいく。

フルートが好きであること、演奏者に面識があること、フルートだけでなく、踊とのコラボがどう展開するかに興味をもったことなどがきっかけだ。

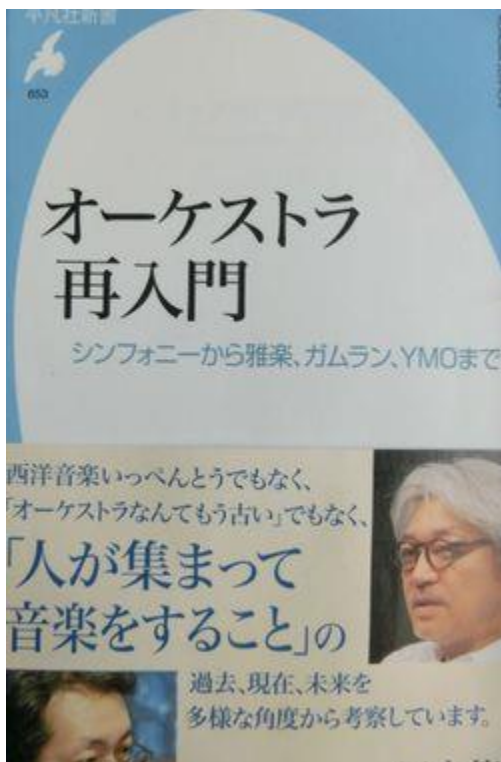
聴いたことがある曲は惹きこまれるようにして鑑賞。最後のメインのプロコフィエフとなると、初めてだということもあって、私の集中は途切れがちだ。

それにしても、オンチの私にしては、だんだんコンサートの類に馴染んできたな、と思う集中がとぎれるどころか、集中さえできなかったかつてと比べれば、ずいぶんマシになったものだ。全体として、うっとりという気分になる時間が長くなった。

フルートの曲に合わせて、琉球舞踊とクラシックバレエとコラボでの踊という、チャレンジングな試みもあった。十分にこなれているという印象ではなかったにしても、意欲的創造的なものを強く感じさせ、今後の可能性が大きいものだろう。

クラシックの若い方が、こうしたチャレンジングな試みをする事自体に、大きな期待を抱く。

関心を持って、今後の展開をみつめていきたい。



## 小沼純一「オーケストラ再入門」平凡社2012年を

読む

2014年04月12日

芸大授業が終わったこともあり、音楽の本を読むのは、しばし休憩状態になるだろうと思っていた。でも、店頭で、この本を見て、思わず購入し読んでしまった。

帯には、こう書かれている。

「西洋音楽いっぺんとうでもなく、「オーケストラなんてもう古い」でもなく、「人が集まって音楽をすること」の過去、現在、未来を多様な角度から考察しています。」

内容はまさにその通りで、各章のタイトルはこんなものだ。

第一章 オーケストラとは何か

## 第二章 楽器の分類と編成

## 第三章 さまざまな音楽1 雅楽からガムランまで

## 第四章 さまざまな音楽2 ジャズ・オーケストラを中心に

## 第五章 伝統の再解釈から新たな「場」の創造へ

## 第六章 映画のなかのオーケストラ

## 第七章 オーケストラの未来

このところ、シュガーホール企画で、オーケストラにつきあうことができた私にとって、格好の入門書だ。それだけでなく、第三章第四章のように、多様なオーケストラの紹介があり、クラシック・オーケストラしかイメージしなかった私の視野をぐんと広げてくれた。

その多様な話題のなかで、雅楽にかかわって、こんな一節がある。

雅楽には「自然との関わり感覚が残されています。この点はインドの古典音楽などともつながっています。自然といったいになった時間性、季節性、古代性は、雅楽のありようをささえているものにちがいません。(中略) 楽園的というか、葛藤がほとんどない。西洋近代音楽の大きな特徴の一つは葛藤でありコントラストであり、それは人間というものが近代になってクローズアップされたことによる音楽、俗世間の音楽なのかもしれません。逆に、グレゴリオ聖歌と仏教の声明の平坦さに通じるものを雅楽に感じてしまうのは、それが人間を中心とした音楽ではないからかもしれません。そしてもちろん、その平坦さ、少ない変化の中に、変化を見出していくことが面白い音楽であるともいえます。」

P100-1

40年以上前、沖縄に住み始めた私は、当時流行っていた「はいさいオジサン」などは別にして、沖縄音楽の大半になかなかついていけなかった。それはとくにゆったりさだだった。とくに八重山音楽に感じた。ところが、徐々にその世界にはまってゆく。そこに自然の流れを感じたからかもしれない。

そして、それは、私にとって癒し効果を絶大に発揮したように思う。自然の流れとしての音楽という捉え方は、絶妙に思う。

対照的に、オーケストラを含む近代クラシック音楽は「葛藤」「コントラスト」という説明もわかりやすい。それは人間の間で生じるものであり、そのなかに個人個人がいかにか生きるかという問いをたてて、感性的表現を追求するものだったのか、と教えられたわけだ。

この問題を、本書の最後に問いとして提出している。

「多くの人が集まって音楽をする、というありよう、とりあえずオーケストラと呼ぶことができるありようは、個人が音楽をやることを選択し、ある責任を集団のなかで果たすことでもあります。オーケストラなるものへの無関心、無理解は、とりあえず十八世紀以降につくられてきた、個人個人が参加して社会を成り立たせてゆくありようへの危機でありように考えるのは無理があるでしょうか。(中略) あらためて、音楽を例として、一人や二人、数人ではなく、大勢でやる、ということのを再考してみてもいいのではないかと私は考えたりするのです。」P218

私がオーケストラに関心を持った一つのきっかけは、高校時代に読んだマカレンコ「教育詩」であったし、また、1970年代に多くのことを学ばせてもらった家本芳郎さんの著書や実践などであった。それは、多様なもののハーモニーという世界への関心であり、1980年代後半から多用しはじめた「異質協同」という発想からであった。

そして、最近、オーケストラとのつきあいも少し出始めたので、改めて考えたくなったのだ。そして、本書で知ったわけだが、オーケストラには多様なアプローチがあるし、それは既製品スタイルを消化吸収(鑑賞)するというより以

上に、新たな創造として構想するものであった。日本でのクラシックは、演奏家や音楽家でない素人にとって、その創造に関与するなどとは遠い遠い話だという現状を越えたものをどう構築するのか。それは、クラシックの他のジャンルとの協同という形で表れやすい。

こんなことへの、多様で大胆なチャレンジする場として、シュガーホールはとてもいい位置にあり、その役割を果たしつつもある。

そんななか、オンチの私が、音楽とどう付き合っていくのだろうか。先はわからない。

### 近藤ひろみさん新居でアフリカ音楽演奏会

2014年03月30日

「出会い・集い2007～2015年」に掲載済み

### 沖展鑑賞

2014年03月29日

年度末になってきた。専任職にあったころはあわただしい季節だったが、このごろはゆとりがある。来客の流れも一段落つき、そして、4月からの授業準備も完了し、一息ついたので、27日沖展鑑賞に出かける。

数年に一度ほど、出かけている。

美術工芸は素人なので批評できないが、全体の印象として水準が高くなっていると感じる。洗練されているというべきか。

それにしても、この分野でも、創作人口が増加しているのだろう。

平川良栄さん（うるま市長賞受賞）、當山雄二さんといった親しい方も出展していた。私が出展することはありえないが、恵美子はブイアートを出そうか、などと驚くことをつぶやく。

鑑賞者は、平日昼間なのになかなり多い。中高年女性の多さが目立つ。鑑賞者にも、勢いを感じる。沖展の裾野の広さを感じた。

この日は、沖展前後に、沖リハ・看護大によって、4月からの授業のテキストとプリントを預け、久しぶりのおもろ町にも立ち寄った。渋滞にはあわなかったが、自動車の多さには驚く。那覇浦添の町中を走るの少ないが、私の原型である1970～1980年代風景とはまるつきし変わっている。

おきでんシュガーホール新人演奏会オーディション 2014年03月25日

「南城2013～2017年」に掲載済み

うらやましいシュガーホール・ジュニアコーラス 定期演奏会 2014年03月17日

「南城2013～2017年」に掲載済み

シュガーホール活性化計画答申を市長に提出 2014年03月06日

「南城2013～2017年」に掲載済み



## 磯崎主佳展&大池功コ

### ンサート

2014年03月03日

1日夜は、新里の「風の里」での磯崎主佳展&大池功コンサートに参加。磯崎さんのとても印象的な絵がますます深みと輝き

を増している。大池さんも彼特有の「やさしさと味わいのミックス」が濃くなってきた印象だ。お二人の今後のますますのご発展を期待したい。



## 三島わかな「近代沖縄の洋楽受容」の書評会

2014年02月23日

21日、県立芸大で書評会がもたれた。音楽・音楽史・一般史・教育史など多様な分野の方々が集って、いろいろと語り合う大変有意義な会だった。

ここで、私が語ったことの主ポイントをかいつまんで書こう。詳しくは、現在連載中の沖縄音楽教育史をご覧ください。

沖縄および沖縄人は、音楽について豊かな歴史的蓄積と、豊かな音楽習慣・能力・意欲・感性をもってきた。そこに、

明治期に、まずは学校唱歌という形をとって「洋楽」が、権力的色彩をもちつつ導入され、それを沖縄人に浸透させようとする動きがあった。それは「近代」を主として「国民統合」という主題で展開したものであった。それに対して、単に「受容」という事ではなく、独自の対応し、その中で、沖縄なりの「近代」音楽を作りだす動きの先駆的なものが、明治末期以降生まれてきた。そこにおけるドラマを描きつつ、その特性と構造を解明しようとする著書である。そして、そのことを通して、沖縄音楽の創造が、日本全体の「近代音楽」（いや世界音楽というべきかもしれない）の創造、ないしは「近代音楽」からの卒業ないしは再編の中でいかなる位置と役割を果たしているのか、果たしていくのか、という問いの基盤を作りだしている。

そうした極めてメッセージ性が強く、チャレンジングな著書である。そこをどう読みとるかと言う事は、著者だけでなく、読者側の課題、そして沖縄音楽界、さらには沖縄教育界の課題でもある。

ということで、本書の続編作業がどう展開していくのか、私は深い関心をもって見つめていきたい。

## 「難しいけど面白かったという感想は教育で作られた」！

### 小池博史舞台芸術「銀河鉄道」

2014年02月03日

1日夕方、シュガーホールでの公演、そして、翌2日のミニフォーラムに参加した。

公演を、リーフレット表紙の文で紹介しよう。

小池博史ブリッジプロジェクト『銀河鉄道』

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」をモチーフに、今を語る物語。

能楽もバレエも演劇もコンテもありの幻惑世界に、パーカッションとハーモニカ。美術も衣装もぜんぶ紙だ。

百年前の過去と百年後の未来のまんなかにいる<わたし>を通して、世界をもう一度見てみたい。

ヒトは、弱く愚かで滑稽、でも強く、しなやかに輝く美しき生きもの、だから。

なんともまあ不思議な世界を見せられて、「難しいけど」「よくわからないけど」「面白かった」という感想が、最大公約数のようだ。

私などは、出会ったことがない世界を投げつけられて、どうしようか、しばし、もしかして数年間、どうするか、どう着地するか、そのうち、なんとかなるだろう、という気分だ。

セリフより、激しく多様で創造的なパフォーマンスの世界だ。コンテンポラリー・ダンスとかいわれたりもするらしい。論理性を伴った文字で分かろうとする人は、大変苦勞するらしい。小さな子ども、海外でウケがよいとも言われる。

この記事タイトル「難しいけど面白かったという感想は教育で作られた」は、確か小池さんの発言。なるほど、と思う。身体表現を受け止めることに慣れていない人は戸惑うだろう。

この作品への動機には、3・11があり、成長信仰と原発不可欠論の上にあったこれまでのありようを問い、新たなありようを作りだそう、というものがあるとの事。

私のこのところの探究と重なり合うところがある。

また、作品は、小池さんが書いた脚本があり、それをベースにしつつも、多様な出演者、音楽、美術・・・の方々が、出会いの中で共同創造していった、という面を強くもっているとのこと。そんな出演者などの各々の表現が多様に絡み合う面白さを感じる舞台だ。

写真は、裏手の海岸から撮影したシュガーホール



## シュガーホールニューイヤーコンサート「新世界より」 2014年01月13日

昨年の「第九」に続く第二弾が、1月11日に開かれた。会場いっぱいの盛況だ。

参加者に馴染みのある人が、以前の数倍となり、地元のシュガーホールという色彩が少しずつ増えている印象だ。

オーケストラというと、敷居を高く感じる人が結構多いが、シュガーホールのこれをはじめとするいろいろな企画で、身近に親しみやすいものを感じるようになった人が多いのではなかろうか。私もその一人だ。

南城市内の中学二年生全員には、事前にオーケストラに親しめるワークショッププログラムがすでになされている。その中学生のリクエストで「湘南乃風 炎天夏」も演奏された。さらに地元の合唱団・中学生コーラスと一緒に「大切なもの」もレパートリーに入る。さらに、「モルダウ」「ET」も演奏される。



こんな風に親しみやすく工夫されているが、何人かの参加者からも、「歓迎」の声が聞かれた。また、会場に貼られた中学生の感想の声には、ワークショップをとおして、直に楽器・演奏に触れて、衝撃を感じたというものが目白押しだ。

また、新人演奏家入選経験のある演奏家が何人もおられ、演奏家にも親しみを感じるようになってきた。ステージと会場との往復運動が随分豊かになってきたことを感じる。

「新世界より」は、わたしにとってもなじみのある曲だが、オーケストラを直に聞けて、とても良かった。オンチの私だが、結構楽しめた。聞きながら、いろいろな情景が浮かんできた。激動と静穏とが繰り返す。

この後も、シュガーホール企画が目白押しだ。

ロビーでのケーキ・コーヒーなどの販売も行列ができる。



以下は、「沖縄の歴史・民俗2013～2017年」に掲載済み

沖縄音楽教育史 22回連載 (2014年1月16日～3月31日)

久万田晋「沖縄の民俗芸能論」を読む 8回連載 (2014年2月13日～3月13日)

黒島精耕「ダートゥーダー探訪の旅—小浜島民俗歌舞の源流をたどる—」(2012年沖縄自分史セ

ンター刊) を読む 2014年01月12日